

6/28

あべ守一後援会総会

あべ守一後援会会長 樽川通子 事務所【サロンしもすわ内】0266-28-5012

ご案内

と き・平成27年6月28日(日) 13:30分より

場 所・東御市 ラ・ヴェリテ (TEL 0268-62-1128)

参加費・会員 - 無料 : 一般 - 1,000円

13:00	13:30	14:00	14:30	15:30	15:40	17:30	18:30
受付	総会	県知事 報告	記念講演	休憩	パネルディス カッション	懇親会 ワイン & ティー	

記念講演 : 地方創生・提案「農村消滅論からの大転換」

講師 ■松尾雅彦氏 (カルビー元社長、NPO法人「日本で最も美しい村」連合副会長)

パネルディスカッション : 「あしたの長野県を創る」

パネラー ■松尾雅彦氏 (カルビー元社長、NPO法人「日本で最も美しい村」連合副会長)

■小林りん氏 (「インターナショナルスクール・オブ・アジア軽井沢」代表理事)

■阿部守一知事

コーディネーター ■若林邦彦 (あべ守一後援会副会長)

懇親会 ■ワイン&ティー 会費 2,000円

記念講演者紹介



「スマート・テロワール」著者
松尾雅彦氏

* 曖昧な活用の 100 万 ha の水田を畑地に大転換すれば

* 農村は 15 兆円の穀物産業を創造できる

* 食と農を地域にとりもどす農村自給圏の構想

限界集落、市町村消滅!? が叫ばれています。本当でしょうか。
とんでもない!

「消滅どころか、農業・農村にこそ成長余地がある」と松尾雅彦さんは主張し、その具体的な方法論として『スマート・テロワール』を提唱されています。鍵は、余っている水田の畑地への思い切った転換と、そこで自給率が低い作物を育て域内の既存の工場で加工すること。そして消費者に新鮮なうちに届け、最高の味を提供するとともに、流通コストを抑え、「日常食品」で輸入原料による全国ブランド商品と対抗することです。

こうして作付けされていない 100 万 ha の水田がよみがえれば、15 兆円の新しい産業が生まれます。

ポテトチップス事業で契約栽培を推進し市場価格の 30% オフを実現したイノベーター、カルビー元社長、NPO 法人「日本で最も美しい村」連合副会長の松尾さんの「辺境からの変革」の提案をお聞きください。

学芸出版社 前田 裕資

パネラー紹介



「ISAK」代表理事
小林りん氏

明日のアジアを担う、子ども達のために

インターナショナルスクール・オブ・アジア軽井沢は、各分野で次世代をリードしてゆける子ども達の育成を目指す、少人数制の全寮制インターナショナルスクールです（対象：高校 1～3 年生の男女）

ミッション

アジア太平洋地域そしてグローバル社会のために、新たなフロンティアを創り出すチェンジメーカーを育てます。

ビジョン

アジアに冠たる教育機関として、以下の素質を備えるチェンジメーカーを育成します。

- 1) 自らの個性と強みを認識し、伸ばす努力を惜しまない
- 2) 何事にも敬意をもち、多様性を尊重し、創造的に考える
- 3) 目的意識と、社会に対する使命感をもって生きる

これらを実現するために、私達の学校では以下のプログラムを実施します。質の高いアカデミック・プログラムを通じて、自ら考え判断することのできる思考力を培います。デザイン思考を取り入れた教育を通じて、物事を俯瞰する力、創造的に考えながら、多様な価値観の人々と協働する力身につけます。座学と実践のバランスのとれたリーダーシッププログラムを実施します。

多様なバックグラウンドをもつ生徒達が寮生活を通じて、学力だけでなく人間性の面でも成長し、リーダーシップを発揮できる機会を提供します。アウトドア教育を通じて、自らを見つめ、自然を尊び、チームワークを養います。

東御市は「信州ワインバレー構想」の一翼を担っています。

懇親会・ワイン&ティー

会費：2,000 円

17:30 ~ 18:30

松尾さんはワインが日本酒とともに「スマート・テロワール」実現に向けての取組の第一歩として適しているのではないかと提案しています。

NAGANO WINE、豊かに実りました

Beautiful place, Wonderful grape and Special wine.

「地方創生」一つの提案

スマート・テロワール「美しく強靱な農村自給圏」

限界集落、市町村消滅！？本当だろうか。消滅どころか、農業・農村にこそ成長余地がある。その事実を阻んでいるのは、水田を偏重する「瑞穂の国」幻想だ。

余っている水田や休耕田を畑や放牧地に転換し、その生産物を域内の工場で加工すれば、味はもちろん、価格も輸入原料によるナショナルブランド商品に負けないものが作れる。

その商品を域内の消費者に新鮮なうちに届け、最高の状態で提供するとともに流通コストを抑える。そこで大事なこと

は高級品でなく、日常食品でシェアを確保してこそ量のメリットも得られることだ。そうしてこそ、一部ではなく全体の復活につながる。

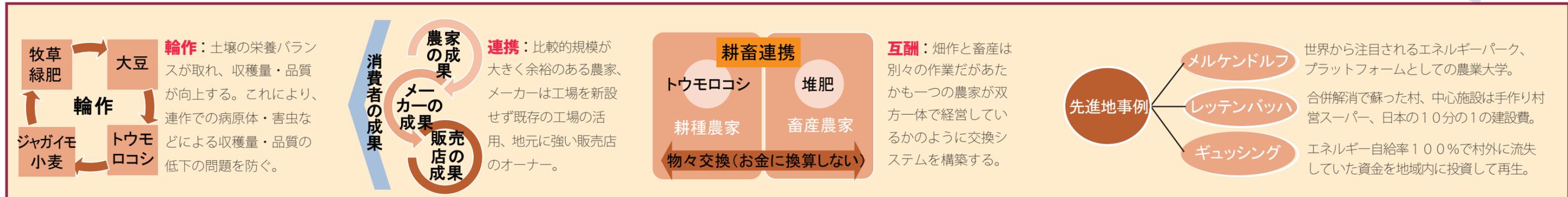
その結果、あいまいな活用の水田 100 万 ha がよみがえれば、15 兆円の新しい産業創造につながる（ジャガイモの生産と加工によるカルビーの工場出荷額から試算）。

契約栽培で市場価格の 30% オフを実現したカルビー元社長の「辺境からの改革」提案です。

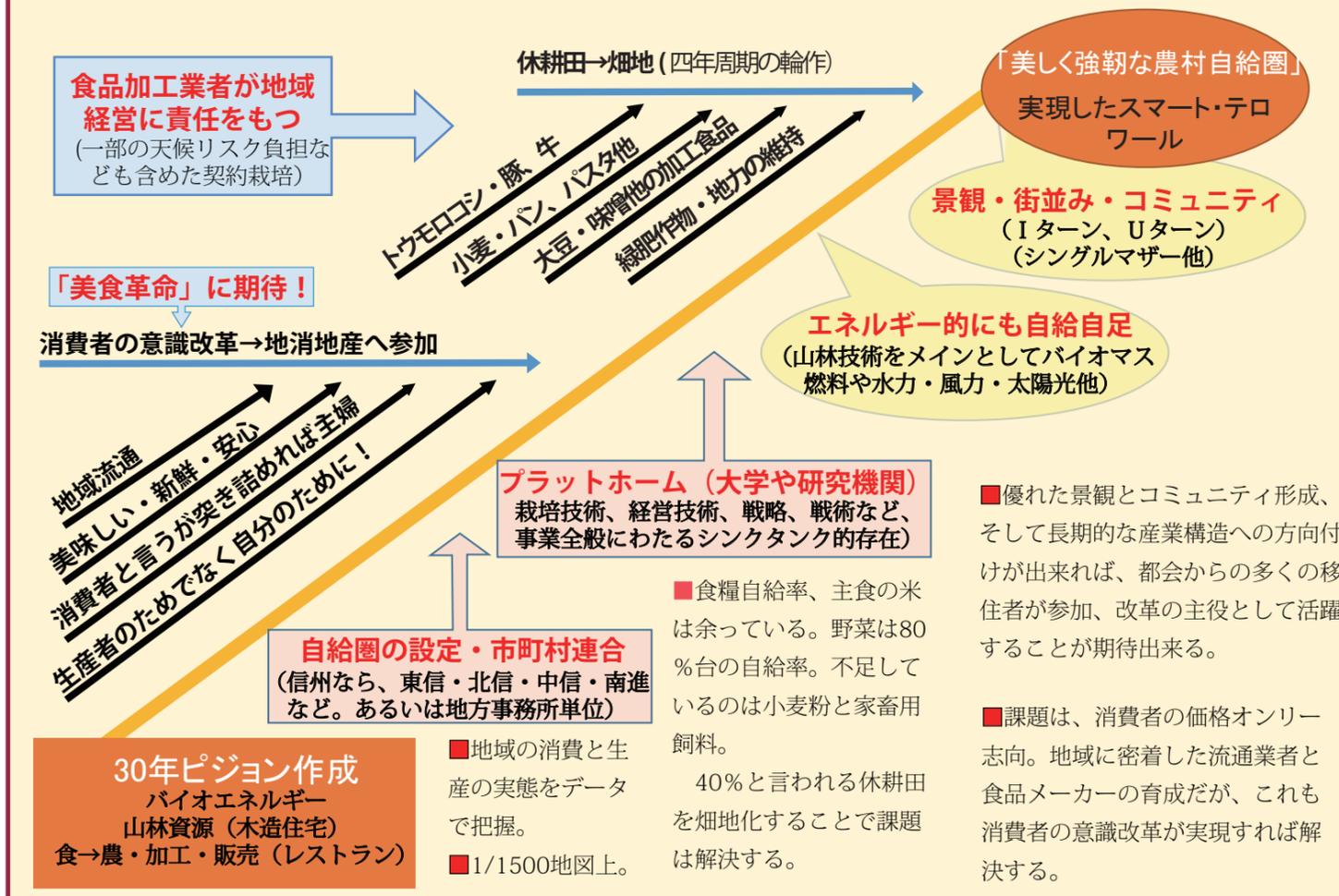
原点はカール・ボランニーの名著「大転換」、「互酬、再配分（含む家政）、交換」三つのキーワードで社会や経済の仕組みをとらえ、市場経済一辺倒から脱却し非市場経済の有効性に注目すべきと主張しています。

そこには、理論だけでなくカルビー社長としての経営現場での実践を通じた学びが活かされています。

「あとがき」に記されたお父上の座右銘「一生一研究」に負けまいと挑戦したライフワークの成果がこの提案に集約されて



地産地消による食とエネルギー自給自足への道筋



農政の四つのジレンマ

1. 「食糧供給過剰時代に農村が市場経済にたよっている」

主食の米はもちろん多くの食材は供給過剰です。野菜ですら 90% 近い自給率が実現しています。こうした状況下、農家は常に市場での低価格圧力にさらされ十分な異常気象対応などに取り組むことが出来ません。

2. 「供給者対策が全国一律に展開されている」

消費者の購買行動で全てが決まるのに、対策は供給者対策に重点が置かれています。しかも地域の特性や品目の特性などを考慮せず全国一律の支援策にたよっています。

一部地域に限定した政策は不公平が責められます。最近規制を解除する「特区」制度が広く採用されていますが、規制こそ全国一律で廃止されるべきものです。問題の本質は他にあるのではないのでしょうか。

3. 「供給過剰になった水田を畑地に転換できない」

休耕田に象徴される農村の荒廃に危機感を持ったのは都市住民でした。棚田の保存や日本を「瑞穂の国」と崇める空気が広がりました。知識人も水田擁護の論陣をはりました。いつかは食糧危機がやってくる。そして、日本は食糧危機の時代を迎えたときに稲作が生命線になるという信仰を広げたのです。その信仰こそが農村疲弊の元凶なのです。大きなジレンマです。

4. 「重商主義者が農村政策をつくっている」

大都市東京で、自然界の法則を重視しない人たちが農業・農村政策をつくっていることこそが最大のジレンマです。三か月の決算で評価を問われる大企業が集中する東京の発想に対して畑作農家には最低でも四年間の輪作の成果が問われます。18 世紀のヨーロッパで行われた議論「農業を重視した政策で国を豊かにすべきか、商工業を重視して交易で上がる利益を優先するか」を思い起こすべきです。

- 優れた景観とコミュニティ形成、そして長期的な産業構造への方向付けが出来れば、都会からの多くの移住者が参加、改革の主役として活躍することが期待出来る。
- 課題は、消費者の価格オンリー志向。地域に密着した流通業者と食品メーカーの育成だが、これも消費者の意識改革が実現すれば解決する。

- 食糧自給率、主食の米は余っている。野菜は 80% 台の自給率。不足しているのは小麦粉と家畜用飼料。
- 40% と言われる休耕田を畑地化することで課題は解決する。

- 地域の消費と生産の実態をデータで把握。
- 1/1500 地図上。